



香取で暮らす、香取を楽しむ情報紙

かとり

Kat^{ori}

平成29年(2017) 1月15日号 No.260

大粒イチゴの源流

高級果実 アイベリー

カトリノ郷物語

まだ見ぬ美味しさを語り明かす

vol. 21

15日号は農政課で募集した「香取の逸品」にスポットをあてます



吉川 博之さん (阿玉川)

現在、構成員11人のJAかとり小見川イチゴ部会に所属。部会をけん引してきた父親の跡を継ぎ、父、母、妻、妹の5人で、大粒イチゴのアイベリーを栽培する。高い品質のイチゴは、高級フルーツ専門店へも出荷している。

「家では、イチゴの話はすっかりしていますね。アイベリーの大きさを、味にすっかり魅せられ、細々とずっとやってきました。甘いだけではなく、酸味のバランスも取れ、味の濃い大粒で形の良いイチゴを目指しています。特に土壌の環境と苗作りには気を使っています。夏場の育苗と土作りでイチゴの生育が決まってしまうのです。質の向上はまだまだできると思っています。栽培期間は長く、病気や害虫の管理も大変ですが、最高のイチゴを作ることに全力で取り組みたいです」
理想とするイチゴの姿にブレはない。現状に満足せず、さらなる高みに向かう姿勢から、イチゴ作りへのこだわりが伝わってきた。

この熱心な取り組みは、息子の博之さんに受け継がれた。資材、技術などの情報収集や導入など、よく研究していると他の生産者からも評判だ。土壌を覆うマルチを変えたり、発売されたばかりの天敵保護装置を設置したりと常に新しいものを取り入れようとしている。
現在、アイベリーは都内の高級フルーツ専門店の新宿高野にも卸しているという。大粒のアイベリーは非常に手間がかかるため、他の産地では新品種に切り替えられてきた。幸い、香取市は、都内など需要が多い都市部に近く、生産を絶やさず継承してきたことが、その希少さもあって注目された。

吉川さんたちの取り組みは、次第に周辺のイチゴ農家に広がり、特に堆肥作りに力を入れ、研究を重ねながら高品質のイチゴへと育てていった。

「そのついでに、幼い頃から家族旅行といえ、必ずイチゴの産地巡りをしていましたね。当時から静岡にはよく行ってました」
「現在のイチゴ部会にまで発展する転機となったのが、「アイベリー」の登場で都内の販路を拡大したことだった。その時も、アイベリーが香取に根付くのをずっと見守ってくれていたのは、静岡の農家だった。」「

次々と新品種が発表されているイチゴ業界で、今から30年以上前に、衝撃の走った品種があった。その名前は「アイベリー」。大きいものでは一粒80グラムを超え、子どもの握りこぶしほどにもなる。甘い、酸味のバランスも良く、果色や果肉、艶、味が濃い優れた品種だ。
この地で、長年アイベリーを栽培してきたのが、小見川イチゴ部会だ。そもそもここにイチゴをもたらしたのは、吉川さんの父、勝男さんである。高校時代に農業実習で訪れた静岡県でイチゴと出会い、栽培を決心したという。その後も、静岡の実習先の農家に熱心に何度も出向き、栽培方法を教わり、日本で最初のイチゴ福羽の苗を分けてもらってこの地に持って来たそう。その後、勝男さんの声掛けで、小見川、栗源、山田、東庄の生産農家が手を携え、所属する農協の枠を超えた部会の前身水郷イチゴ出荷組合が昭和44年に設立された。当時の小見川町農協は、米とイモの出荷が大半を占め、生産者間で立ち上がったイチゴ部会には出荷スペースを間借りして始まったという。それが、現在のイチゴ部会にまで発展する転機となったのが、「アイベリー」の登場で都内の販路を拡大したことだった。その時も、アイベリーが香取に根付くのをずっと見守ってくれていたのは、静岡の農家だった。」「



- 02 香取市の学校再編
- 02 国民年金保険料の前払い方法が拡大
- 03 佐原税務署に確定申告書作成会場を設置

特典 動画付き

COCOAR2アプリをダウンロード
アプリを起動し表紙にかざす



アプリアイコン

iOS・Android対応



アイベリー

JAかとり小見川経済センターで
予約の上、購入できます。

☎0478(82)1403

